



海と山を結ぶ古道をゆく

空は快晴、風は穏やか。すがすがしい朝の空気が、今日の旅路への期待を膨らませる。進路は南西、潮の香りのする方へ。

今はまだ山深い物部の地で、海からかけ離れた場所にいるが、これから野を越え山を越え、かつて塩市で栄えた商いの町・赤岡まで歩く。いにしへの往還、全長約30kmの土佐塩の道を踏破するウォーキングだ。



物部町大栃を出発し、しばらくは国道や生活道を交互に歩きながら進む。山里の風情を楽しみながらの道のりだ。春の日差しは穏やかそのもの。吹き抜ける風が気持ちいい。

道の脇に、和紙加工に使ったという大がまがある。かつて大栃は、楮や三椏を原料とした製紙業が盛んで、その遺物だという。しばらく進むと、中谷川トンネルの手前に山へ向かって延びる細い道があり、ここからいよいよ本格的に往還道へと入る。急な山坂を、道がなだらかになるまで一気に登り、息をつく。鼓動が高まり汗がにじむが、それがかえって心地いい。土と落葉の山道がサクサクと軽快な音を立て、足を軽やかに運ばせる。はるか昔から人と馬が踏み固めてできた道である。

周辺の木々は、歩き進むうちにスギやヒノキ、広葉樹とその表情を変えていく。草木や土、落葉、岩といった景色が続く中、赤く小さな木の実が

①昔あった樋ノ下橋を再現。こけむしたいい雰囲気を出している ②スギ林の中に行く。ふかふかの山道は足に優しい ③庄谷相屋敷丁石。塩の道保存会にガイドを申し込むと歴史やいわれを語ってくれる ④川のせせらぎを聞きながら陽光降り注ぐ道を歩く

どこかで出会ったようなそんな道

あなたもきっと歩きたくなる

土佐塩の道

土佐塩の道は、いにしえから今に続く歴史と文化の道。赤岡と物部の地を結び、かつては塩をはじめとしたさまざまな生活物資が運搬された相互往來の産業道でした。長く歴史の影に埋もれてきたこの道は、地元の有志たちの手で美しくよみがえり、かつてのにぎわいとはまた違う形で新たな輝きを放っています。



※写真は、3月26日に行われた『第8回土佐塩の道30kmウォーク』と、4月23日に行われた『歴史と文化の融合 Salt Road Jazz』の様子です。

